



ハレとケ 晴れと曇

永田円了

Out of the Ordinary

民俗学では非日常を“晴れ”、日常を“曇”（け）と呼ぶ。日頃、目の前の日常のみを、ただ惰性的に生きていくと、エネルギーが枯渇する。そのことを穢れ（気枯れ）という。日常という井戸からのみ水をくみ上げ続けた結果、当然のことながら井戸は枯れる。枯れないようにするためには、非日常の井戸からも水をくみ上げる必要がある。

空虚になりがちな日常の中に、何か変化をもつこと。それは、あるときには年に一度のお祭りであったり、年期の法事であったり、身近なところでは、演劇や音楽会、旅行、それも一人旅がいい。団体旅行は日常がただ移動するだけだから。

1年が、年々速く感じる

さて、あなたの心は今どういう状態だろうか。1年が以前より短く感じていないか。もしそのように感じ始めたなら、心の大掃除が必要かもしれない。映画『おくりびと』の冒頭、主人公は言う。「子どもの頃感じた冬は、こんなに寒くなかった」。

子供のころの心には、冬は楽しいことがいっぱいあったはず。お正月、おひな様、雪合戦、スキーなど、“晴れ”のエネルギーが生き生きと躍動していた。



年を重ねるごとに、何故こんなにも年月が速く過ぎてゆくのだろうか。30代と40代を比べると、確実に40代の年月が速かった。50代はもっと速かった。それでは60代、70代はもっと加速度を増すのだろうか。1年という時間は全ての人に等しく時間を刻んでいるはずなのに、どうして速く感じたり遅く感じたりするのだろうか。

空虚な年月 vs. 豊富な年月

トーマス・マン著『魔の山』の一節にその答えが語られている。「1時間、1日という場合には、単調とか空虚さは、時間を引き伸ばして“退屈なもの”にするが、1年間という大きな時間量の場合には、空虚、単調さはかえって時間を短縮させ、無に等しいものに消失させてしまう」。

「その反対に内容豊富で面白いものだど、短時間なら速く感じ、時間量の大きな1年間だと時間の歩みに幅、重さ、厚みを与えるので、貧弱で空虚な歲月より、経過するのが遅く感じる」。

心の老い

肉体の老いを恐れず、ただ心の老いを怖る（中国の諺）。心の老いに対処する手立てはあるのか。ある。非日常（晴れ）のエネルギーに生を与えることである。何か面白いこと、ワクワクすること、意外なことを日常（曇）に取り入れることである。年を重ねるごとに、いや若くても、リスクを極端に嫌い、石橋を叩いて渡ることのみを生活習慣にすると、人は空虚な日常（曇）に埋没してしまう。

<事例 DVD>

河合隼雄／非日常（晴れ）と日常（曇）、祭りの役割
 映画「おくりびと」子どもの頃に感じた冬はこんなに寒くなかった
 南こうせつ／母親の気が枯れていた
 小山修三／縄文時代の祭り、巨木をどうやって運んだのか
 映画「ルーシー」／人類は脳の10%しか使っていない
 ブルース・リー／月を指さす指の先を見よ
 川井郁子／バイオリンの彼方にあるもの
 川井郁子 & 錦織健 / 荒城の月

円了のホームページ：www.enryo.jp



川井郁子